

ボランティア手記

(社)新日本建築家協会近畿支部
震災対策委員会副委員長 現地対策責任者

坪岡 秀明

車中は大きなリュックサックを担いだ人、戦時中の買い出しのように大きな荷物を持った多くの人々で満員である。その中にカメラを肩からぶら下げて今からハイキングにでも出かけるような人もいる。何か異様な感じに見える。やがて目的地に近づくにつれ窓から見える景色は、建物の屋根に被ってあるブルーのテントが見え初め、それがやがて半分倒れかかった建物や全壊した建物が増えてくる。人々はこれらの光景に驚きの声を出し、これから先の状況を案ずるかの様に物思いに耽っていた。

我々の所属する(社)新日本建築家協会は、我々建築家にとって、今「何をすべきか」「何が出来るのか」と各方面との協議の結果、東灘区と灘区の建物の応急危険度判定をする事になり、あの震災から10日後の1月27日の午前7時頃神戸へと向かう阪神電車の車内での様子である。

阪神青木駅に降り立ち東灘区役所へ行く道中は、至る所で建物が倒壊し、道路が陥没し、空には轟音を轟かして飛ぶ数機のヘリコプター、地上ではあちらこちらから聞こえる救急車や消防車のサイレンの音、町のあちこちに見える黒煙、至る所で倒壊した建物の解体作業が行われており、その付近に花が供えられている光景が見られ、焼け跡を掘り起こし何かを探している人々の姿も見られる。これが1,400余命の尊い生命が奪われた東灘地区の様子である。

応急危険度判定の現地責任者としての私は、奈良県橿原市を朝6時に出て8時45分には区役所に着く。その日の調査予定分を配分し、その日に申し込みにこられる被災者の受付の

準備をし、夕刻には調査担当者の帰還を待つ。その結果報告を受け、翌日の調査のための準備をして区役所を出るのが、早くて夜の7時。帰宅するのが夜の11時以降という日々を、2月20日頃まで過ごす。その間、全国各地から延べ1,953名の会員ボランティアによる協力で、6,902件の調査を行うことが出来た。

相談の中には、建設業者に見てもらったら解体しないと駄目、修理は不可能と言われたが、しかし素人目で見ても修理が出来るように思うので調査をしてもらいたい。と言うような相談がかなりあり、これらについては補強工事の方法を指導し、たとえ2～3年でも仮住まいをし落ち着いた頃に改築されてはとアドバイス出来た建物が多かったように記憶している。又半壊し次の余震で倒れそうな建物の中で、崩れた床の上に毛布を敷きホームコタツを置いて、何することなく座り込んでいる住人に補強工事の方法の話をしたことも昨日のここのように思われる。

震災の直後、何故あの様に急いで多くの建物を解体する必要があったのだろうか？

確かに被災した建物の多くは老朽化しておりある面で寿命であったかもしれない。現建築基準法に合致した建物でなかったかもしれない。賃貸住宅の土地所有者は、早く解体して新しい建物を建築したかったかもしれない。近畿地方では想像もしていなかった今回の大震災、何の予備知識もなかっただけに、目先の判断で即決した結果でなかったのではないだろうか。その結果多くの人々が仮設住宅での生活を強いられ、今日に至っている。今回の震災で多くの物が失われたが、今なお色々な物が失われつつある。学校敷地に仮設住宅があることにより教育の場が失われ、又公園を占領する事により憩いの場が失われている。政府は一刻も早くこれらの問題点を解消することに努力し、安全で快適な生活が出来るように努めなければならない。

毎日のように区役所に詰める事で、市民の

方々には我々は市職員のように見えたのでしよう。現地のことが判らない我々に無理難題を言われたり、中にはお酒を飲んで来ていくら説明をしても判ってもらえなかったり、特に5時をすぎると職員はほとんど帰宅してしまい庁内に残っているのは我々と同じようなボランティアのメンバーばかりとなりその対応には非常に苦労した。何故職員がこれらの対応が出来ないのかと考えた事もあったが後日考えてみると5時に帰られた職員の方々も被災者であり、もしも私とその立場であれば出勤さえ出来なかったのではないかと考えると、頭が下がる想いです。

自然が我々に与えた多くの試練に逆らうことなく、日常の業務にこの経験を生かし、災害の起きない街づくりに励みたいと思う。

最後にこの様な大震災に対して被災地の人々の冷静・沈着な態度は国の内外から多くの称賛を受けられました。被災者の方々に敬意を表すると共に、この震災で亡くなられた方々のご冥福を祈り、又被災地の一刻も早く復興を願うものである。

阪神・淡路大震災と シルバーインフォメーションルーム

シルバーインフォメーションルーム

地図上では震災の被害が一番大きかった神戸市東灘区にある当ルームは、幸にも建物も資料の被害もほとんどない状態でした。スタッフの中には、家が全半壊の者達は数人はいましたが、ケガをしたり家族を失ったメンバーが一人もなかったことは本当によかったと思います。

たまたまルームの近くに住み、比較的被害の少なかったメンバーが、震災直後の1月19日から避難所の小学校、地区の集会所で、介護や手助けが必要なご老人と、その世話をし

ているご家族を訪ねてまわり出しました。寒さが足下から突き上げてくるような体育館、教室、廊下等に、各自の荷物を置く場所もないほど布団を敷きつめたなかで、じっと横たわってられるご老人方の辛さは、大変なものであろうと心が痛みました。

震災のショックで寝たきりになられたご主人のおむつの交換のお手伝いをしているとき、「せめて主人だけでも病院か、施設に入れてもらえないだろうか」と問いかけられ、あちこち交渉をし、大阪の病院へ無事入院することが出来たこと。又、家具の下敷きになり腰をいため、小学校の保健室に保護されていた独居老人が、3週間後には一応回復されたが半壊の自宅にも帰れず、まだリハビリも必要な状態だったので、親戚の近くにある、大阪府下の老人保健施設にお願いして迎えに来てもらった例など、さまざまなことがありました。

電話が使いやすくなり出した震災3週間後位から、当ルームの本来の仕事である電話と来所による「ご老人の介護に関する諸問題に対する相談」業務を再開しました。ルームの事務所には、家が全壊したご家族が避難して来られていたこともあり、メンバーの家で3月末まで曜日を問わず、毎日電話の受付をしました。

老夫婦二人で暮らしておられた家が全半壊したり、ライフラインが途絶え老人だけでは生活していけなくなり、息子、娘さん方が引き取られたが、いろいろ心配な面や、不都合が発生してきたのでどうすればよいか、といった相談が多くありました。また、入院しておられた病院が壊れたり、往診してもらっていた近所の医院がなくなったりしたため困っているなど。3月に入ってからは、学校の避難所で働いている学生ボランティアが、3月末をもって一応引き上げるので、避難所におられるご老人たちをどうすればよいか、福祉事務所に尋ねても忙しすぎるのか、なかなか解